



TITLE:

天象

AUTHOR(S):

CITATION:

天象. 天界 1932, 13(141): 30-33

ISSUE DATE:

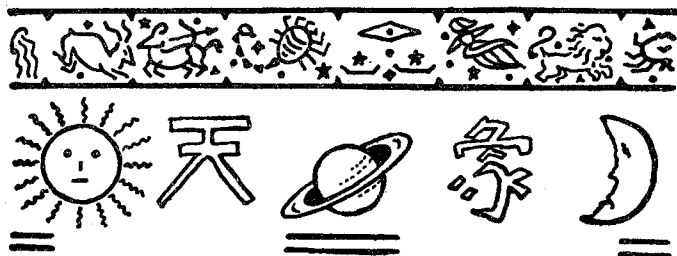
1932-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162299>

RIGHT:

一九三三年
(昭和八年)



I——太陽と月（天空の明暗）

太陽				月				月 の 相
日付	日出	(星 座)	日 没	月 齢	月出	(星 座)	月 没	
日	時 分		時 分	日	時 分		時 分	
1	7 5	(い て)	4 56	4.1	10 34	(みづかめ)	22 31	●上弦 4日01時24分
6	7 6	ク	4 59	9.1	12 43	(ひ つ じ)	2 38	
11	7 6	ク	5 4	14.1	16 41	(ふ た ご)	7 19	○満月12日05時36分
16	7 5	ク	5 8	19.1	21 59	(し う)	9 46	
21	7 3	(や ぎ)	5 13	24.1	2 35	(てんびん)	12 9	●下弦19日15時15分
26	7 1	ク	5 19	29.1	7 30	(や ぎ)	17 50	●新月26日08時20分
31	6 58	ク	5 24	4.7	9 48	(う を)	23 15	

II——著 し き 天 象

一月	4 日	早 曉	カドラント座流星現はる
	4 日	17時 44分	天王星($S4^{\circ}19'$)と月の會合
	9 日	2時 ——	木星の停留
	16 日	1時 33分	海王星($N 1^{\circ} 05'$)と月の會合
	16 日	23時 05分	火 星($N 5^{\circ} 08'$)と月の會合
	17 日	2時 56分	木 星($N 3^{\circ} 00'$)と月の會合
	22 日	11時 ——	火星の停留 !!
	24 日	16時 59分	金 星($N 4^{\circ} 25'$)と月の會合
	25 日	15時 04分	水 星($N 1^{\circ} 51'$)と月の會合
	26 日	9時 43分	土 星($N 2^{\circ} 15'$)と月の會合
	27 日	22時 ——	土 星が太陽と會合

冬の代表としての一月の天

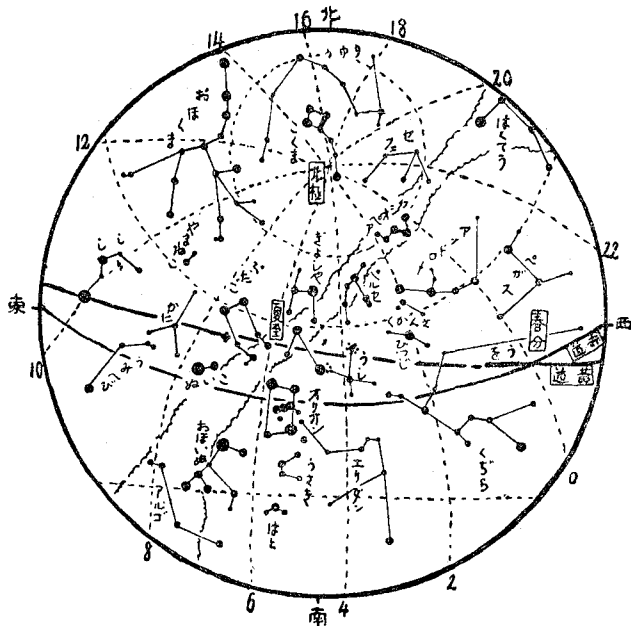
(恒星時 Sidereal Time 4時40分)

日本の中央部(京阪神地方)で

1月1日ならば午後10時, 15日ならば午後9時

東京は約15分早く, 福岡は約20分遅く現はる

但し時刻は日本中央標準時

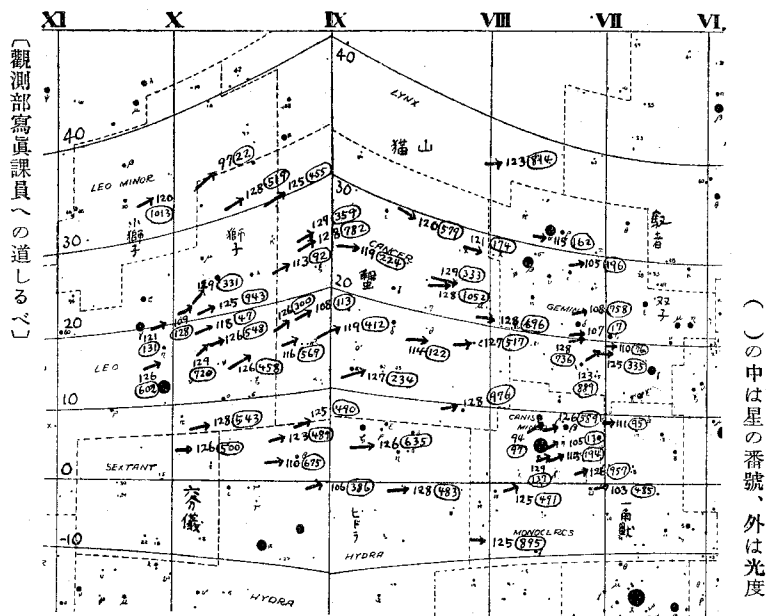


冬の星座

天一ばいに大きく輝いた星が見える壯観は此の頃である。地上では花が凡て散り果て、了つた冬の最中であるのに、天上は今が春の真盛りか、輝いた寶玉にも譬ふべき數多の花が咲いて、魅惑的な光彩に吾々の鑑賞を待つてゐる。先づ銀河は南北に流れてカシオペア、ペルセ等の星座を浸し、大犬座、小犬座を其の流域に包んで居、オリオンと双子座とは其の兩岸に相對峙して互ひに美を爭ひ、馭者と牛の星座も亦、その中流に赫やく。ペガスの正方形は西に傾いたが、アンドロメダ座の渦巻き星霧や、オリオン座のθ星附近の大星霧はまだまだ高く、肉眼にも其れと頷かれる。傳説に傳はる七美女の集り「プレヤデス」は今も尙儼しい光を放つて居、ペルセ座の二重星團は特に銀河中に目立つ。

宵の遊星界は甚だ賑やかである。天王星は西に低い、冥王星は東に高く、天頂に迫り、火星も東天にレグルスと光を競ひ、此れに續いて海王星も既に東に登つてゐる。

1933年一月下旬に接近逆行する小遊星の圖



天象小文

斷想 —— 大いなる星北に流るゝ五丈原の晩秋、將士肅として孔明の禱を聴く。東方老學者の一隊を砂漠の幾百里を誘ひイエルサレムに導く夕の明星、涅槃の悟り圓かにほのぼのと明け行く曉の空に輝く成道の星、この星々はすべて象徴の星であり、天文學者の恒星ではない。私はこの物語に録された奇異なる星を我々の新星(Nova)以上に今興深く見直すのである。藝術の香高い作品の中に見出された月は一度ならず橢圓狀の陰影を失ひ、太陽の光を受けざる半面も美しく光つてゐる。詩人の月は紫色に瘡せ、波止場の電柱に酔ひどれたマドロスとなつて酒臭い息を吐いてゐる。しかもこの月は遠い假想の月空想の月ではなく眞實に人の胸に觸れた月である。「大いなる星一つ、輝いてあり旅の空かな」旅愁を味はふこの旅人には仰ぎ見る星が金星であらうと木星であらうと名を以て呼ぶ以前に既に何よりも良き名「大いなる星」に輝いてゐる。星も月も再び見返へされた時それは生まの儘の世界である。立場に患は

されない純粹な先驗の世界である。月も星も宇宙も必ず天文學でなければ科學でなければ取扱ひ得られない對象ではない。自ら如何に嚴密を誇り正確を自負しやうとも數理自然科學による宇宙觀が宗教や藝術の持つ宇宙觀を嘲ふ自信はない筈である。科學は畢竟科學の假設の上に立たなければならぬのだから。宗教が自らの裏に認める眞實を怪しげお手製の科學に據つて基礎づけやうとする時、迷信が醜怪な頭をもたげ純朴な信仰を慘らしく食ひ殺してつふ。科學的藝術家と自稱する輩がしどろもどろの推理によつて危つかしげな科學を記述し始める時科學者はその卓拔な發見に噴飯させられる。

けれども、斯うした事が立場を換へては全く眞しやかに起り得るのである。天文學は自己の宇宙觀に科學の領域を越えて意味を與へることは出来ない。生まの儘の世界が唯一の科學的思索によつてのみ常に正しく把握されると云ふ根據はない。天文學の宇宙觀は人間の唯一の宇宙觀とは云へない。而もそれを以て直ちに不當にも全生の上に意味づけ擴充しやうとする事は謂はれなきことであらう。

すでに Ostwald の Energy は禮拜されるべき神では無かつたし、電氣は遍在し神變不可思議の奇蹟を現し人生に益する所大であると云つても信すべき對象ではない。しかも高級な頭腦の持主も時には絶島の蕃人の如く偶像にも拜跪しかねない執拗な世界觀の殉教者である。生においては個別的な精神生活の所産は依然月を示す指以上の意味を持ち得ない。併しながら我々自らを科學者と呼び藝術家と名け宗教家と認める以前に正しく一個の人間である。

かゝるが故に偉大なる科學者は詩人 Lucrez の口誦む一聯の詩句の中に自己の思索の道を得、純粹なる自然科學の成果である Darwin の進化論が近代生活を根底深く揺り動かす所以であらう。従つて或意味よりしては類推的直覺により科學より宗教へ藝術より科學へ飛躍することも可能であらう、けれども單純なる自然規定の法則の不用意なる適用が我々の生を味はひ無きものにし、法則が自ら偶像の位に昇るまで倨傲に甘やかされることを常に懼れねばならない。我々は科學のみが、同時に宗教のみが、藝術のみが、我々の生に專横の權力を振ふことを許容してはならない。我々は生の名において自己の科學に藝術と宗教の自由を強く擁護し自ら憑かれたる人たるを免かれなければならないであらう。 (痴蛙子)